

国文研ニュース

No.48 SUMMER 2017



木口木版版刻 エミール・アダン「一日の終わり」

目 次

● 追悼

追悼	相田 満	1
----------	------	---

● 研究ノート

『和漢朗詠集』の和歌の表記	恵阪友紀子	2
ホノルル美術館リチャード・レイン コレクションの意義 ー 整版本『大坂物語』20点の比較からわかることー	入口 敦志	4
戊辰内乱の記録と記憶ー「大館戦争」の事例からー	宮間 純一	6

● トピックス

閲覧室だより	神作 研一	8
特別展示「伊勢物語のかがやきー鉄心斎文庫の世界ー」他の予定	小山 順子	9
平成29年度「古典の日」講演会		10
<国文学研究資料館展示室より> 特設コーナーのご案内		10
フォーラム「なぜアーカイブズは必要なのかPart.2		
地方再生に向けた公文書管理」の開催	堀内 暢行	11
茨城大学地球変動適応科学研究機関 (ICAS) と連携協定締結		12
シンポジウム「書物と文化」		13
第41回国際日本文学研究集会		13
総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況		14

追悼

平成29年2月6日(月)12時、古瀬蔵^{ふるせ くら}先生の急逝を伝える報せが飛び込んできました。その前週の会議や前々日の4日(土)に名古屋で開かれた学会と懇親会で御一緒したばかりなのに、とても上機嫌で盛り上がっていた様子でしたのに、信じられないことでした。よりにもよって、前日に同じ会場で人間文化研究機構の資源共有化事業の新システムリプレイスの難事業をやり遂げて、お披露目が行われたばかりなのにです。

古瀬先生は定年で退職された安永尚志先生の後任として、平成21年度から当館に赴任されました。「日本電信電話株式会社 NTT サイバーソリューション研究所」からの転身です。前の職場の同僚には村上征勝先生の後任で赴任された統計数理研究所の松井知子先生がいらっしゃいます。

前任の安永先生と同様、古瀬先生も工学部のご出身でした。前の職場では機械翻訳とか情報検索とかといったテキスト処理を中心とする情報処理を専門とされていました。

国文学研究資料館と情報処理技術との関係には、半世紀近い長い歴史がありました。前任の安永先生の時代は、テキスト記述法もまだ規格化されていなかった時代で、様々な実験的試みがなされてきておりました。

国文学研究資料館は、そうした取り組みにいち早く取り組んだ組織でした。まだJIS漢字の規格化が果たされなかった時代から漢字を使用し、時には漢字を作り続けて電子化に取り組んできた組織でした。しかし、皮肉なことに、取り組みが早過ぎたがために、少なからぬ情報レガシーが残されていました。それらは時に時流に取り残されて面倒を見る人が誰もいなくなる危険をはらんでいました。

日本文学及び関連分野の研究基盤を整備するために蓄積された情報資源を安定的に受け継ぐことと、それらの情報資源を高次に利用に資するために、先進性とイノベーションを確保することとは、時に矛盾します。そうした中で、人が変わってもデータを受け継げる体制とシステムを整えるという困難な問題の解決に古瀬先生は腐心されてきました。

古瀬先生の残されたお仕事をたどってみますと、業務系のデータを安定的に受け継ごうとするためになされてきた、多くの目配りに気づかされます。

一つ一つを挙げることは出来ませんが、古瀬先生との思い出で印象的なのは、赴任されて間もない平成22年12月に連携研究のランチ「生き物供養から見る自然観の変遷」研究の合宿を秋田で開いた時のことでした。まだGIS(地理情報システム)を生かした見栄えの良いシステムが簡単には造れなかった頃のこと。フィールドワークを反映させたデータベースを構築するために、どのような研究情報が必要かアイデアを出し合う会議を行いました。どのようなデータをどのように作り上げるか全く予想も立たない中でのブリーフィングに古瀬先生もおつきあい下さり、誰でも見て分かり簡単に扱えるデータを基本とすることを訴えて、国文学研究資料館の論文目録データベースのプレゼンテーションをされたことを覚えています。

そのプレゼンテーションは、私にとって長い間付き合ってきたデータベースについてのものでもありましたし、当時は何と言うこともないものに思えた



故 古瀬蔵教授

写真提供 / 有限会社えくてびあん

ものでした。しかし、後で思い返してみると、それが継続性のある情報システムを維持するためのポリシーを述懐する内容であったことが痛いほど分かりました。古瀬先生のそれは、一つ一つのデータベースにふれながら、時には大量のデータを御自身で入力されながら当館システムの実態の把握をされた上での発言だったのです。

古瀬先生の葬儀は、客死された名古屋で営まれ、そのまま荼毘に付されました。しかし、知己の多い東京でもお別れの要望もあって、10日に、お住まいの江東区越中島にほど近い富岡斎場で法要が営まれました。その際、古瀬先生はご自宅でも奥様のデータ入力のご助力を得ながらデータ形成を進められてきたということが奥様のご挨拶にありました。古瀬先生が様々な方面に目配りをする事が出来た秘密の一端が明らかになったようなエピソードの開陳でした。

古瀬先生がご逝去された1ヶ月前、国文学研究資料館公開のデータベースに恒久的URLであるパーマリンクが付され、このことに多くの喜びの声が上がっていることと、これが古瀬先生のおかげであることが紹介されました(注)。いかにも古瀬先生らしい地味だけれど着実な仕事ぶりであったとの賛辞のコメントは、古瀬先生へのよい手向けとなったことでしょう。道半ばで夭折されてしまったことは、惜しまれますが、残された私たちは、古瀬先生のポリシーをこれからも受け継ぐことを肝に銘じたく思います。

相田 満(国文学研究資料館准教授)

<http://digitalnagasaki.hatenablog.com/entry/2017/03/22/181444>
(digitalnagasaki のブログ, accessed 2/6/2017)

『和漢朗詠集』の和歌の表記

恵阪 友紀子（京都精華大学特任講師）

共同研究（若手）「『和漢朗詠集』の伝本と本文享受の研究」において、鎌倉期以降に書写されたものを中心に、諸本を調査する機会を得た。五十種ほどの資料調査を経て気付いた書写上の特質について述べてみたい。

平安期書写の『和漢朗詠集』は、粘葉本・雲紙本（三の丸尚蔵館蔵）などをはじめ、装飾料紙を用い、卷子本に仕立てられたものが多い。粘葉本は漢詩を楷書・行書など変化をつけて書写する。鎌倉時代書写の伝世尊寺行能筆本（逸翁美術館蔵）などでも楷書や行書を書き交ぜている。また、隸書を用いる写本もある。このように、料紙や装丁だけでなく、表記にもこだわったものが多く見られる。

和歌の場合にも、たとえば雲紙本や関戸本では、上下巻それぞれの巻末の和歌を草仮名で三行にゆったりと書写する（その他の部分では二行書き）。平安時代書写の伝公任筆本（三の丸尚蔵館蔵）や葦手絵本（京都国立博物館蔵）では、より多彩な表記がなされる。

たとえば、上巻夏部端午158番歌「昨日までよそに思ひしあやめ草今日わがやどのつまと見るかな」は、葦手絵本では「昨日左右 四十爾思非時 綾目草 今日吾屋戸能妻東見鉤」（原文では空白なし、以下同じ）、秋部月258番歌「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも」は、「天原 振去見者 春日在 御笠乃山爾 出之月可毛」とあるように万葉仮名風の表記になっている。伝公任筆本でも、春部花123番歌「世の中にたえて桜のさかざらば春の心はのどけからまし」（粘葉本は第三句「なかりせば」）は、「世の中に 絶天桜の さか佐良者 春能古々路者 乃止計唐猿」とするように、万葉仮名を用いて書写された歌もある。

万葉仮名風に表記する例が見える伝本は、ほかに戊辰切（平安書写）や南北朝書写の伝足利義輝筆本（国文学研究資料館蔵）、伝後醍醐天皇筆本（陽明文庫蔵）などがある。伝後醍醐天皇筆本では、下巻松428番歌「我みても久しくなりぬ住吉の岸の姫松いく代へぬらむ」は、「我見天茂 久卅六成怒 住吉農 岸乃姫松 以具代迦怒良舞」とあり、第二句「久しく」の「しく」を「卅六」（四×九＝三十六）と掛け算を利用した戯書も見られる。

『和漢朗詠集』の和歌を真名で書くことについては、山田俊雄「和歌の真名書きについての試論－朗詠和歌を中心に－」（山梨大学学芸学部研究報告書、5号、1954年12月）などに指摘がある。ただし、今回調査した伝本の中では、真名書きされた歌は一部であって、すべての歌を真名で書いたものは見出せていない。

また、夏部扇201番歌「天の川川辺涼しきたなばに扇の風をなほやかさまし」は、伝公任筆本に「天河々辺涼（支）店播（爾）扇（乃）風遠猶也加左猿」（〈〉は小字、以下同じ）、

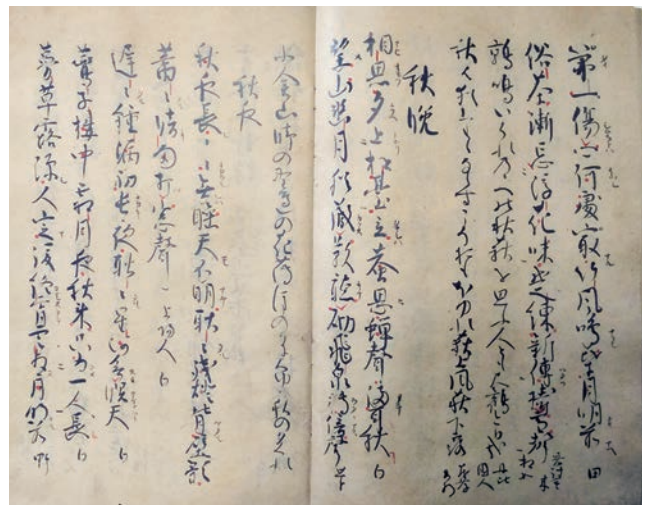
秋部雁付帰雁326番歌「春霞たつを見すててゆく雁は花なきさとにすみやならへる」は、葦手絵本「春霞立を見棄（天）行雁（八）花無里（耳）棲夜習へる」とするなど、宣命書風にする例も見られるのである。

葦手絵本も伝公任筆本も卷子本であり、装飾料紙が用いられるもので調度品として書写されたものと思われ、ただ単に書写するだけではなく、書写そのものを楽しみ、表記に変化をつけたのではないだろうか。

特に伝公任筆本は万葉仮名風、宣命書風の表記以外にも、少々遊び心が過ぎた当て字をしている。春部落花124番歌「我やとの花見か寺に來人者塵南後處恋之狩部木（わがやどの花見がてらに來る人は散りなむのちぞ恋しかるべき）」、夏部郭公183番歌「さ月暗不審に時鳥鳴なる声のいと、春袈裟（五月闇おほづかなきにほととぎす鳴くなる声のいと遙けさ）」のようなものである。読もうと思えば読めるが、これらの歌を知らなければ読み難い。このような当て字も後世の写本に多く受け継がれている。たとえば、下巻風401番歌「あきかぜのふくにつけても十羽ぬかな（秋風の吹くにつけても間はぬかな）」（戊辰切）、鶴451番歌「弱の浦に（和歌の浦に）」（書陵部蔵天和元年書写本、谷21）のような例である。「弱」は弱輩・弱年など若いの意から「わか（和歌）」の表記に用いたのだろう。

万葉仮名にしても宣命書にしても当て字にしても、歌を知っている前提での表記であり、書写を楽しみ、書写された文字を目で楽しむものであったといえるのではないだろうか。

このような表記がもっとも豊かな伝本の一つに今治市河野美術館蔵の久我長通筆本（長通本）が挙げられる。該本には康永甲申（1344年）の奥書があるほか、筆者を久我長通とする極札（了音、了仲の二種）と延宝三年の法橋牛庵

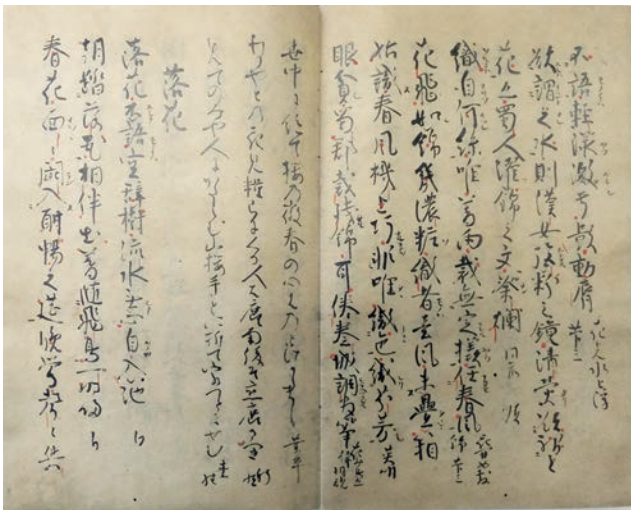


今治市河野美術館蔵久我長通筆本「秋晩」

の折紙が付属する。

長通本では、晩夏169番歌「夏は鶴扇と秋の白露と（夏果つる扇と秋の白露と）」、立秋206番歌「秋きぬとめには鞘蟹見えね軀（秋来ぬと目にはさやかに見えねども）」、虫332番歌「今金と誰田飲劔秋夜をあかし鐘管松虫の鳴（今来むと誰たのめけむ秋の夜をあしかねつつ松虫の鳴く）」のように、随所に戯書が見える。

また、秋晩232番歌は「小倉山脚の野辺の花薄ほのかに見ゆる秋の夕くれ」とある。初句から第二句の「小倉山脚の野辺の」は、「小倉山ふもと野辺の」と読むと思われる。しかし、「脚下」を「ふもと」と読む例は神田本『白氏文集』（京都国立博物館蔵）に見えるが（築島裕『訓点語彙集成』汲古書院による、以下訓点語の引用はこれによる）、「脚」の一字で「ふもと」とは読み難い。「山脚」が山すその意であることから、「小倉山脚」と続けることで「小倉山ふもと」との読ませようとしたのだろう。ところが、秋部霧343番歌にも「河霧の脚を籠て立ぬればそらにそ秋の山は見えける」とあり、これもやはり「脚」を「ふもと」と読まなければ意味が通らない。先の232番歌で「山脚」から「脚」を「ふもと」と読ませたことから、343番歌では「脚」のみで「ふもと」としたのだろう。



今治市河野美術館蔵伝久我長通筆本「花」

さらに、漢文訓読語を用いた表記も散見する。『和漢朗詠集』の和歌には「なかりせば」と詠まれる歌が四首あり、長通本では「子日する野辺に小松の微千世のためしに何を引まし」（子日31）、「鶯の声微雪消ぬ山里いかで春をしらし」（鶯74）、「世中に絶て桜の微春の心はのとけからまし」（花123）、「世中に牛の車の微思の家を争出まし」（僧611）のように、すべて「微」一字で表記する。訓点語では、『弘決下典鈔』（金沢文庫）に「微」に「ナカラマシカハ」の訓が

見える。

また、「暁のなからましかは白露の起て際陳き別れせましや」（暁420）の「際陳き」は、他本では「わびしき」とある。「侘際」を「わぶ」、「陳」を「しく」と読むことから「際陳き」は「わびしき」と読ませていると考えられる。このほかにも、「わかやとの花見糧らにくる人は塵南後そ恋鹿るへき（わがやどの花見がてらに来る人は散りなむ後ぞ恋しかるべき）」（花124）、「さ夜深くね寝さりせは（小夜深く寝覚めざりせば）」（郭公185）、「夜を寒みね寝てきけは（夜を寒み寝覚めて）」（霜373）、「晩月夜小倉の山に（夕月夜小倉の山に）」（鹿337）、「早晩千年を我はへに劔（いつか千歳をわれは経にけむ）」（仙家付道士隠倫553）などのように、和歌ではあまり用いられない文字遣が多く見受けられるのである。

なぜこのような表記が用いられたのか。長通本は、素紙を用いた冊子本であり、葦手絵本などのような調度品ではない。該本には康永甲申の書写奥書の前に嘉禄二年の本奥書があり、その最初の部分に「此集少年之昔受庭訓之本」とある。庭訓のための書であれば、単に書写を楽しむための表記ではなく、和歌の書写に訓読語等を用いることで、それらを学ばせた可能性が考えられるのではないだろうか。

長通本以外にも訓読語を和歌の表記に用いた例はさまざまな伝本に見られる。先に挙げた書陵部天和元年書写本には、「昏て行秋の記念にをく物は我もとゆひの霜にぞ有ける（暮れてゆく秋のかたみに置くものは我が元結の霜にぞありける）」（九月尽278）、京都女子大学蔵世尊寺行能筆本には、「想像意許はあるものをなにへたつらむみねのしらくも（思ひやる心ばかりはあるものをなにへだつらむ峰の白雲）」などとある。「記念」を「かたみ」、「想像」を「おもひやる」と読む例は訓読語に見られる。これらの例は、知らなければ読み難いものではあるが、文字から読みを推測することは可能である。

万葉仮名や宣命書、戯書や訓読語などを用いた多様な表記からは、本文を正確に伝えるというよりは、見た目を重視する調度品としての意味のほか、文字や訓読の学習という性格も読み取れるのである。

ホノルル美術館リチャード レイン コレクションの意義 — 整版本『大坂物語』20点の比較からわかること —

入口 敦志（国文学研究資料館准教授）

平成29年2月17日、ホノルル美術館において「日本古典籍ワークショップ」が開催された。私は、リチャード レイン氏が収集した『大坂物語』の整版本20点を取りあげて、版本の諸問題について報告を行った。ここでは、レインコレクションの『大坂物語』の版種を報告するとともに、版種の比較をするに際してのデジタル画像や書誌情報の問題点についても考えてみたい。

＊ ＊ ＊

版種の比較は、ホノルル美術館からデジタル画像を前もって提供してもらうという、大変恵まれた環境で始まった。それに、早稲田大学古典籍総合データベースで公開されている3種の画像などを使い、デジタル画像で公開されているものを網羅的に比較しようと考えていた。しかし、比較をはじめてみるとこれが意外に難しいのである。この点については、後で考えてみたい。

そこで、前もっての細かい比較はあっさりとあきらめて、下準備として大まかに版式だけでとりあえず分類することとした。具体的には、行数・匡郭の有無、柱題、魚尾の有無の4つの項目である。その結果、20点の整版本は以下のとおり、AからHまでの8種類に分類できた。配列はおおよそ時代順としたが、あくまでも私の判断による仮のものである。

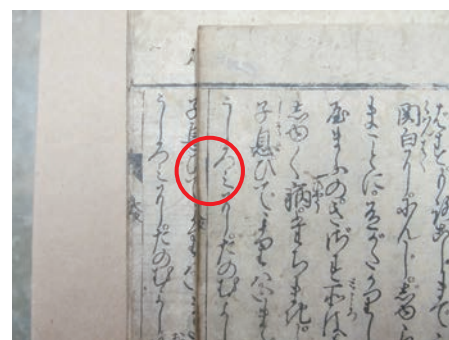
版種	点数	匡郭	行数	柱題	魚尾	備考
A版	1	無辺	11行	大坂	ナシ	
B版	6	双边	12行	大坂	双魚尾	1649年刊
C版	3	单边	14行	大坂	ナシ	1668年刊
D版	1	双边	12行	大坂物語	ナシ	1671年刊
E版	2	双边	12行	大坂	ナシ	
F版	4	双边	12行	大坂物語	ナシ	
G版	1	单边	16行	大坂物かたり	ナシ	
H版	2	单边	14行	大	ナシ	1722年刊

これをもって、ワークショップ直前に現物の調査を行った。すべてを一度に出納してもらい、並べながら細部の比較を行った。その結果わかったことは以下のことである。

1. 同じ版で複数あるもののうち、C、E、F、Hの4つの版はすべて同版、すなわちそれぞれ同じ板木から刷り出されたものである。

2. Bは一見同版に見えるが、現物を詳細に比較してみると4種の異版があることがわかった。仮に、BA、BB、BC、BDとする。【図1】

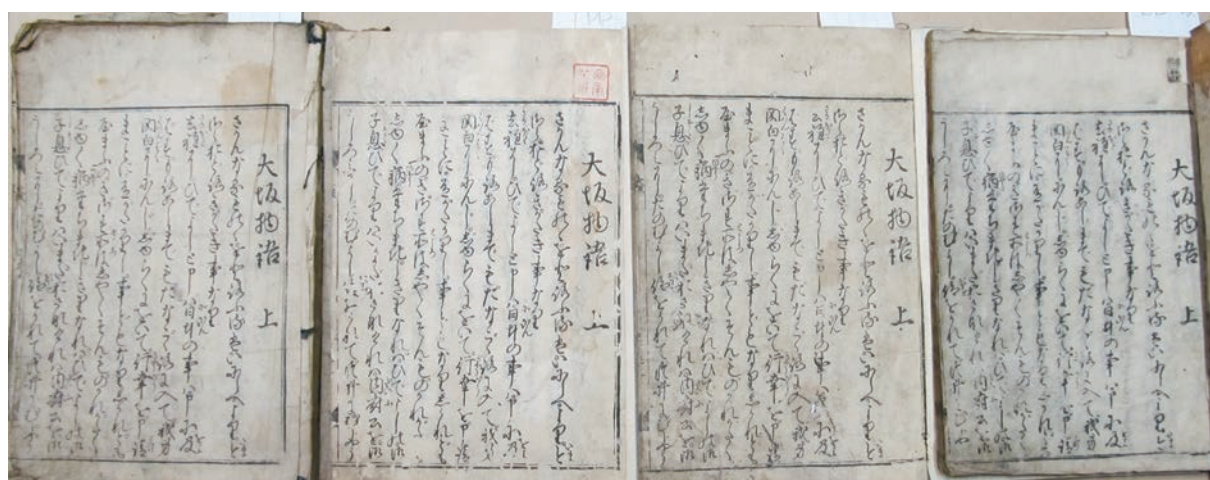
3. Eの版面はほぼBと同じであるが、魚尾がない。Eの柱の部分の詳細に見てみると、削られた痕跡があり【図2】、Bのどの版かの板木を利用し、魚尾のみを削ったものと判断される。ただし、レインコレクション中のB版4種中にはEの元となった版は見られない。よって、ここにはないBE版があったと予想される。



【図2】BC（左）とE（右）の比較。E○囲みの部分に魚尾を削った痕跡が残る。

て、ここにはないBE版があったと予想される。

Bとして分類していた6点が4種類の版種に分かれ、更にそれ以外にも別の版種が想定されるという結果には正直驚いた。デジタル画像を眺めていた時点では、おそらく同版であろうと思っていたからである。あらためて現物の持つ情報量の多さを痛感するとともに、レインコレクションの持つ意義を再認識した。



【図1】Bの異版冒頭の比較。左からBA、BB、BC、BD。内題下の「上」の字がすべて微妙に異なっている。

『大坂物語』は、大坂冬の陣（1614年）と夏の陣（1615年）の様子を描き、速報のようなかたちで出版された。ひらがなを用いた出版物としては最初期のものでもある。豊臣家の滅亡という耳目を引く事件の大きさと、ひらがな文の読みやすさが相まって、多くの人に読まれたであろうことは、ここで確認したような版種の多さが物語っている。『大坂物語』の需要が非常に高かったこと、著作権の意識が低く、比較的容易に覆刻などを行うことができたことの二つが版種の多さの要因として考えられるだろう。その出版も享保頃を境として、ほぼ終結する。ただ、新たに出版はしないが、残っている板木による刷り出しは享保以後も行われていたと考えられる。このような傾向は多くの仮名草子類に共通する特徴と言ってよい。

＊ ＊ ＊

ここ数年、古典籍に関する多くの画像が公開されるようになってきた。当館が中心となって推進している歴史的典籍NW事業もその一翼を担っている。全体像はわからないが、日本の古典籍に関するものだけでも既に十万点は超えるのではないかと。その結果、同一タイトルの異種の写本や版本までもが、居ながらにして比較できるようになったことは画期的である。これまでは、各地の図書館に調査に赴き、古典籍一点ずつの調書を作成し、その調書を比較して検討していたものだが、現在は各種の画像を直接比較することが出来るようになった。

仮にレインコレクションのB版一点ずつの書誌カードを採ったとしよう。その6枚のカードに記載された内容を比べてみても、B版に異版があることを確定することはできない。書誌事項はほとんど同じになるからである。匡郭の高さに数ミリの違いはでてくるが、それだけでは異版かどうかは判断できない。

しかし、デジタル画像を比較すれば、かなり詳細な比較ができる。ノートに記載した書誌情報だけの比較とは雲泥の差があるはずである。ところが、JPG画像やPDF画像などをモニター上に複数開き比較をしてみようとするのだが、細かく微妙な点になればなるほど難しくなってくる。行数や匡郭の有無などは一目で判断できるのだが、同版か異版かの判断はなかなか難しい。同じ箇所を比べてみても、全く同じようにも見え、文字のハライやトメの大きさが微妙に異なっているようにも見えてくるのだが、縮尺・歪み・紙の折れやシワなどなど多くの要因が重なってそう見えているようにも思えてしまう。何よりも、二つ以上の画像の大きさをそろえて表示することは、私には不可能であった。それ以前の問題として、たくさんの画像を開いて比較していると、今どきの本を見ているのかがわからなくなってしまう。環境は整いつつあるのに、それを有効に利用すること

ができないのである。結局、事前に画像を20数点見てできたことは、書誌カードだけでも可能な大まかな分類だったことになる。私の能力が低いと言ってしまえばそれまでだが、同じように感じている人は多いのではないだろうか。それでも、居ながらにして、しかも短時間にこのような作業が行えることは画期的であること、もう一度特記しておきたい。

この問題は、公開される画像が増えれば増えるほど深刻になるだろう。それを解消するためには、比較を補助するツールが必要になってくる。例えば、北本朝展氏の提唱するスクリプトーム解析による版面の比較（『ふみ』第6号参照）はその可能性を広げてくれるものと期待される。また、目視による比較を容易にするために、画像中のスケールを利用して自動的に縮尺をそろえて対照表示し、拡大縮小が連動するというようなツールがあるだけでも、使い勝手は格段に上がるだろう。

＊ ＊ ＊

レインコレクションの仮名草子はおおよそ500点。ほとんどが整版本であり、また、揃ったものも少なく大半が端本である。しかし、同じタイトルに複数の本があることがこのコレクションの一大特徴と言え、資料群としての貴重さは群を抜くと言えよう。『大坂物語』の整版本を20点所蔵するような図書館や個人コレクターはないのではないかと。しかもそれが仮名草子全般にわたっているわけで、将来このようなコレクションを形成することも難しいと思われる。

この資料群は研究資源としての大いなる活用が期待される。画像のコンピュータによる解析と、原本を直接見ての研究者の判断とを相互にフィードバックしながら研究を進めれば、コンピュータ解析の精度も相当あがると考えられるのである。そして、その成果は、原本を直接比較できないデジタル画像に応用できるようになるだろう。今後期待される研究課題として提案しておきたい。

＊ ＊ ＊

末筆ながら、『大坂物語』のデジタル画像を提供するとともに、全20点の原本の調査を許していただき、この上なく贅沢な研究環境を用意してくださったホノルル美術館の関係各位に、深くお礼を申し上げます。同時に、このようなコレクションを形成されたりチャードレイン氏の慧眼に、深甚の敬意を表したい。

※図版はいずれもホノルル美術館蔵リチャードレインコレクション中の『大坂物語』。

戊辰内乱の記録と記憶 ―「大館戦争」の事例から―

宮間 純一（国文学研究資料館准教授）

慶応4年（1868）正月3日に勃発した鳥羽・伏見の戦いに始まる内乱は、徳川から天皇への政権交代を決定づけた。この戊辰内乱（戦争）に巻き込まれた人びとは、「官軍」≡天皇の直属軍に協力するか、抗戦するかを選択を余儀なくされ、何らかの政治的判断を下すことになる。結果的に、その時に表した「勤王」あるいは「佐幕」の態度は、明治以後の社会活動に大きな影響をおよぼし続ける記憶となっていく。そうした中で、当事者たちは天皇・新政府に対する貢献・功績の主張、「佐幕」行為の弁明を目的として内乱に関する多様な記録を同時代から作成した。ここでは、その一例を紹介したい。

国文学研究資料館所蔵の「出羽国秋田郡大館中田家文書」（以下「中田家文書」）には、久保田（秋田）藩の戊辰内乱に関する資料が多く含まれている。文化8年（1811）に中田家の当主直道が作成した系図によれば、文禄4年（1595）に中田直家が佐竹義宣に召し抱えられた。その息子定直は、佐竹氏が慶長7年（1602）に常陸国から出羽国へ移封されたのに従っている。移封後、定直は30石を給され（のちに20石加増）中士格の給人となった。中田氏は、秋田郡大館（大館市）に屋敷を構え、江戸時代を通じて同地に居住している。

中田家に戊辰内乱の記録が多数伝来したのは偶然ではない。慶応4年は、中田家の歴史上重要な意味をもつ年であった。大館周辺は、同年8月から9月にかけて内乱における最激戦地の一つとなる。中田太郎蔵は、その戦いの渦中に身を投じていく。奥羽越列藩同盟の一員である盛岡藩は、大館城攻略を目指して進軍を開始し、軍将佐竹九郎（佐竹西家当主、大館城代、大和・義遵）率いる久保田藩勢はこれを迎撃した。

久保田藩は、一度は加わった列藩同盟を離脱し、「勤王」の立場を表明していた。そのため、列藩同盟の一員であった盛岡藩から標的にされたのである。久保田藩の立場からすれば自らは「官軍」、盛岡藩勢は「賊軍」となる。8月9日に戦いの火蓋は切って落とされ、戦局は盛岡藩に優位に推移。22日、佐竹九郎は追い込まれて城に火を放って撤退した。戦闘はその後も継続し、9月上旬になって形勢は逆転した。結果的に久保田藩勢は、大館を取り戻すことに成功したが、この局地戦により大館城下は灰燼に帰した。一連の出来事は、地域にとって忘れられない“御一新の記憶”として深く刻印されることになる。

当時32歳であった中田太郎蔵は、このいわゆる「大館戦争」の最前線に「官軍」の「槍隊組頭」・「銃隊組頭」として赴いた。太郎蔵は、約40名の銃卒を率いて合計で17回の戦闘に参加し、14回の「苦戦」と3度の勝利を得た。太郎蔵は、8月9日の盛岡藩の「侵入」とともに十二所方面（大館市）の応援のため「槍隊組頭」に任命された。その後、久保田藩勢が苦戦を強いられるなか、17日に「銃隊組頭」に配置替え。太郎蔵は、中田易太郎ら数名の部下を失ったの

ち撤退せざるを得なくなった。体制を立て直した久保田藩勢は、9月2日から反撃を開始し、「賊を追払」うことに成功した。以降太郎蔵は、地域の情勢が一応落ち着く10月までの間、軍事・治安維持活動に奔走している。

久保田藩では、戦闘従事者の軍功を一等から六等まで細かく区分したが、太郎蔵は「一等」の功績とされている。大館戦争において「抜群」の功績をあげたとされる一等は、中士格では太郎蔵を含め26名（うち戦死者18名）、二等は19名、三等は25名、四等は24名、五等は38名、六等42名であった。一等には、藩から10石が下されることになっている。中田家文書に伝来した戊辰内乱関係文書の大部分（約150点）は、その等級を決定するための軍功の調書類である。

久保田藩では、慶応4年8月段階から藩士の内乱での賞罰を明確化させるべく軍功の調査を進め、明治4年（1871）7月の廃藩まで継続した。これは、新政府による軍功取調に連動して始まった動きである。新政府も慶応4年8月に諸道の総督以下に軍功の取調を命じている。大館方面の戦闘における指揮官であった佐竹九郎は、従軍者の軍功取調を藩から指示された。九郎は、藩士らの軍功のとりまとめを中田太郎蔵と、鉄砲頭であった根本順助、使武者斥候兼をつとめた安士寛蔵の3名に委嘱した。

中田家文書には、「戦争次第書」や「戦争書」、「出兵次第書」、「戦争始末書上帳」といった戦闘経過を書き記した書類が多数ある。これらは、戦闘に参加した本人あるいはその遺族が作成したものである。いずれも、明治2年（1869）から4年にかけて作成されており、各人の出兵から凱旋・討ち死にまでを日付けごとに書き上げ、当該人物があげた軍功を記している。太郎蔵自身が作成した「争戦始末取調書」もここに含まれる。

太郎蔵らは、調査書類をとりまとめ軍功の取調帳や大館戦争の概略を記した「大館戦争凡例目録」など27冊を調製し、明治4年に九郎へ提出した。それらの書類では、出兵した兵士が等級ごとに区分され、それぞれの軍功が端的に書き上げられている。中田家文書に残る草稿類には、太郎蔵による校正の痕跡が残っており、その編纂過程がうかがえる。九郎に届けられた文書は、藩庁へ提出されたと考えられる。27冊のうち4冊は、「御覧済之上」、最終的に中田家へ下げられた。秋田県公文書館所蔵「佐竹西家文書」には、中田家と同種の書類や佐竹西家の家臣の軍功記録が残されている。

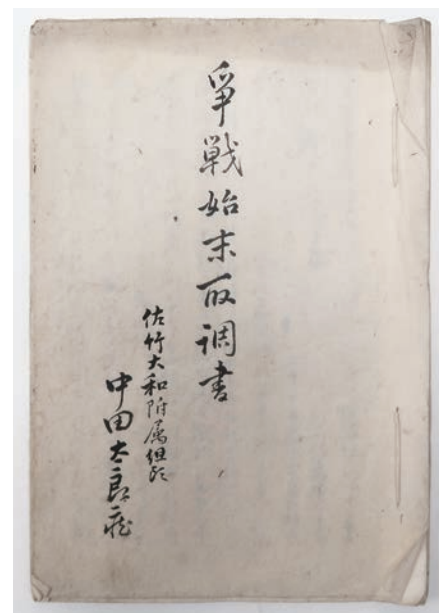
書類が提出された直後に廃藩置県が断行されたため、藩による軍功調査・褒賞は完遂されなかったと推察されるが、太郎蔵らが当時作成した記録類は大館戦争の記憶をよみがえらせるアーカイブズとして長らく利用されることになる。たとえば、大正4年（1915）に開催された「秋田戊辰勤王記念展覧会」に中田直哉（太郎蔵の子）は、太郎蔵の兜・袖印のほか上述の「大館戦争凡例目録」や、やはり太

郎蔵が作成した「大館戦争概略」などを出品している。また、昭和12年（1937）に大館町立大館図書館を会場に開催された「戊辰勤王七十年記念展覧会」にも8点の資料を出陳した。展示だけではなく、大館の有力者が出資して大正6年（1917）に刊行された『大館戊辰戦史』にもこれらの記録は叙述のための材料として大いに活用された。同書刊行の出資者の一人には、直哉も名を連ねている。

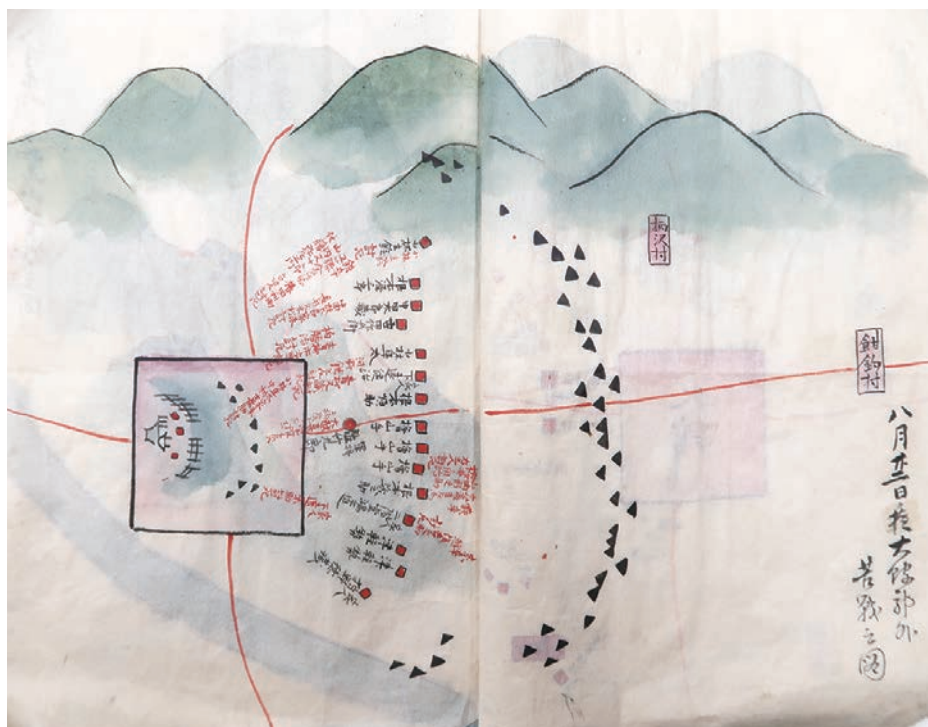
このように、中田家に伝来した記録が頻繁に活用されたのは、中田氏の地域における立場が深く関係している。太郎蔵は、廃藩以後に町会議員を歴任し、町長選でも当選するなど、明治以後地域の有力者としての立場を築いてゆく。つづく直哉は、大館町長・秋田県会議員などを務めて、その地位を確固たるものとした。中田氏は、近代において大館地域を代表する一族となったのである。その中で、地域で慶応4年が回顧されるたびに、太郎蔵が作成・収受した内乱の記録が提供され、大館における戊辰内乱像の形成に影響を与えてきた。また、中田家が所蔵していた記録は太郎蔵を顕彰する根拠となり、地域における中田氏の立場を強化するのに一役買ったと考えられる。

以上のように、太郎蔵らが内乱の直後に作成した軍功取調のための記録は、大館戦争の記憶を語るものとして近代以後活用されてゆくことになる。それらは、本来的には自己の軍功を証明することを目的に産み出された資料であり、「勤王」の功績を謳うものであった。そのため、「史実」からはみ出す叙述も必然的に生じている。

本稿で取り上げた事例は、地域における歴史意識形成、地域のアイデンティティ構築・一体性の創造とアーカイブズの伝来・利用を考える上で興味深い。今後、さらに掘り下げて研究を進めていきたい。



中田太郎蔵作成「争戦始末取調書」



中田太郎蔵作成「大館戦争概略」

閲覧室だより

閲覧室に関わる近年の動向を、いくつかの項目にわけて紹介します。

【A】教科書コーナー

中学および高校の国語教科書および便覧を購入し、閲覧室奥（突き当たり）に「教科書コーナー」を設置しました。2017年6月末日時点で134冊。今後も充実を図ります。

【B】コレクション

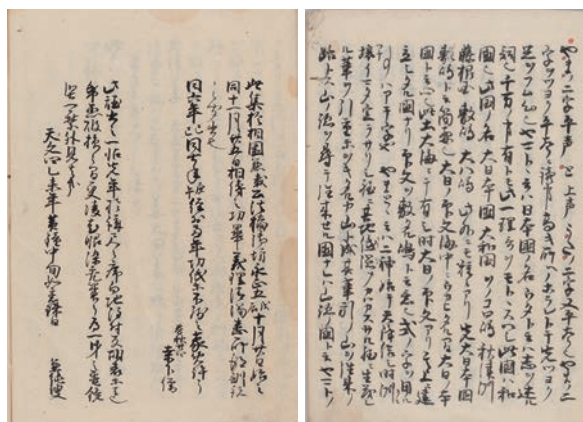
2013年度以降の4年間に購入ないし寄贈されたもののうち、大型のものは以下の通りです。

- (1) 古文真宝・三体詩コレクション（2013～14年度）
書誌学者林望^{のぞむ}氏旧蔵。『古文真宝』は前集・後集合せて610点、『三体詩』は擬五山版を含む118点。
- (2) 山鹿文庫（2014年度）
平戸山鹿家^{ひらどやまがけ}旧蔵。重要文化財55種を含む1321点。
- (3) 鉄心斎文庫伊勢物語コレクション（2015年度）
三和テッキ（株）社長^{あしざわしんじ}長芦澤新二（1924－89）・美佐子^{みさこ}夫妻旧蔵。伝二条為氏筆本など1088点。
- (4) 木藤才蔵コレクション（2016年度）
日本女子大学名誉教授木藤才蔵^{きどうさいぞう}氏（1915－2014）旧蔵。『賦花何連歌』などの連歌書を中心に53点。

【C】貴重書

2014年度以降の3年間で、当館の規程に基づき「貴重書」に指定した書目は以下の15点です。〈 〉内は請求記号。閲覧には「貴重書閲覧願」の提出が必要です。＊当館HPからダウンロードできます。

- (1) 『伊曾保物語』（古活字版3冊）〈99－191〉
- (2) 『ふんしやう』（写3軸）〈99－192〉
- (3) 『富士の人あな』（写3冊）〈99－193〉
- (4) 『奈良絵本一本きく』（写3冊）〈99－194〉
- (5) 『奈良絵本水宮けい』（写1帖）〈99－195〉
- (6) 『春日懷紙緑弁和歌三首懷紙』（写1軸）〈99－196〉
- (7) 『四種類聚抄』（写1巻）〈99－197〉
- (8) 『奈良絵本二十四孝図』（写1冊）〈99－198〉
- (9) 『庭訓往来抄』（写1冊）〈99－199〉
- (10) 『立川普濟寺版 大方弘華嚴經』（刊1帖）〈99－200〉
- (11) 『筆陳』（写2帖）〈99－201〉
- (12) 『万葉集断簡（柘枝切）』（写1葉）〈99－202〉
- (13) 『古今私秘聞』（写1冊）〈99－203〉
- (14) 『芥子園画伝』（刊5冊）〈99－204〉
- (15) 『三酔人経綸問答稿本』（写2冊）〈99－205〉



奥書 本文巻頭
『古今私秘聞』（正宗文庫旧蔵）

【D】中国関係工具書

『中国古籍善本書目』（上海古籍出版社、1989）など79点を新たに購入しました。今後も充実を図ります。

★ご要望が多く寄せられている閲覧室でのWi-Fiの使用に関しても、まもなくご利用いただけるよう鋭意準備を進めています。
(神作 研一)

特別展示「伊勢物語のかがやき－鉄心斎文庫の世界－」他の予定

2016年、当館に大きなコレクションが寄贈されました。鉄心斎文庫です。鉄心斎文庫は、三和テキキ株式会社の社長であった故・芦澤新二氏が40年の歳月をかけ、妻・美佐子夫人と二人三脚で収集を続けてこられた資料約1,000点で、その大半が『伊勢物語』に関連するものであるのが大きな特徴です。

『伊勢物語』に関するこれほど大きなコレクションは他に例を見ず、世界最大の『伊勢物語』コレクションを国文学研究資料館が保存し、後世に伝えてゆくこととなりました。

昨年4～6月には、鉄心斎文庫のお披露目として、当館展示室特設コーナーにて「伊勢物語そろいふみ－鉄心斎文庫コレクション－」と題した小展示を開きました。今年度は本格的な展示企画として、「伊勢物語のかがやき－鉄心斎文庫の世界－」を平成29年10月11日（水）から12月16日（土）まで開催いたします。鉄心斎文庫の寄贈を承け、当館では2016年度から基幹研究「鉄心斎文庫伊勢物語資料の基礎的研究」（研究代表者：小林健二教授）を立てて研究会を開催し、文学・書誌学・美術史等の研究者により、鉄心斎文庫の資料について多角的な研究を進めています。特別展示は、その研究成果を反映したものです。

『伊勢物語』は、その後の文学・文化に大きな影響を与えつづけました。そのため、『伊勢物語』は書き写され、出版され、また講釈・注釈を通じて学ばれ、絵画に描かれ、パロディが生まれ、カルタが作られ…と多様な享受のかたちがあり、様々な楽しみ方をされてきました。特別展示では、鉄心斎文庫資料約1,000点の中から、約80点を選びました。『伊勢物語』という一つの古典文学作品が伝わり、学ばれ、楽しまれてきた歴史を、垣間見ていただきたいと思います。

今年度の特別展示「伊勢物語のかがやき－鉄心斎文庫の世界－」に合わせ、国文学研究資料館では、『伊勢物語』に関連する催しを企画しています。

まず、毎年開催しております「古典の日」講演会が11月3日（金・祝）にありますが、今年度は『伊勢物語』特集で予定しています。講演者は、2014年にペリカン・ブックスから『伊勢物語』の英語訳を出版なさったピーター・J・マクミラン氏（翻訳家）と、『伊勢物語論－文体・主題・享受』（笠間書院、2001）『伊勢物語の生成と展開』（笠間書院、2017）など『伊勢物語』に関する編著書を多数発表なさっている山本登朗氏（関西大学教授・当館客員教授）をお願いしています。

また、特別展示の会期中11月9日（木）には、オペラ「業平 NARIHIRA」（主催：西山文化を語る会）の上演があります。昨年6月に、『伊勢物語』にゆかりある京都の大原野で上演された同作が、特別展示に合わせ当館後援で、国分寺市立いずみホールで上演されることになりました。『伊勢物語』は多くの能の素材となっていますが、オペラで『伊勢物語』の舞台を観られるのは、大変に楽しみです。

その他、ギャラリートークやセミナーも企画しているところです。これらの詳細は、後日、ポスターやチラシ、当館ホームページ等でお知らせいたします。様々な催しにぜひ足をお運び下さい。（小山 順子）



『伊勢絵巻』（098-242）第69段の業平を斎宮が訪れる場面

平成 29 年度 国文学研究資料館「古典の日」講演会

古典の日は国民が広く古典に親しむことを目的として、平成24年3月に法制化されました。11月1日に定められたのは、我が国の代表的な古典作品である『源氏物語』の成立に関して、最も古い記述が寛弘五年(1008)11月1日であるためです。

当館は、「古典の日」の趣旨に賛同し、平成24年度から記念の講演会を催しております。今年度は特別展示に合わせて伊勢物語に関する講演を行います。古典に親しむ絶好の機会となりますので奮ってご参加ください。

日 時:平成29年11月3日(金・祝) 13時30分～16時00分
(開場:12時30分)

会 場:イイノホール(東京都千代田区内幸町2-1-1 飯野ビルディング)
・東京メトロ 日比谷線・千代田線「霞ヶ関」駅 C4出口直結

講演内容及び講師:

- 1 「伊勢物語を英訳すること―その挑戦と醍醐味」ピーター J マクミラン(翻訳家)
- 2 「伊勢物語と平安貴族の生活」山本 登朗(平安時代文学, 関西大学教授・当館客員教授)

聴講料: 無 料

※事前申込が必要です。お申し込み方法については、当館 Web サイト(<http://www.nijl.ac.jp/>)をご確認ください。

申込締切日:平成29年10月6日(金) 必着

※当選者の発表は、10月下旬までの受講票の発送をもってかえさせていただきます。

お問い合わせ先:TEL:050-5533-2910 E-mail:kikakukoho@nijl.ac.jp



昨年の「古典の日」講演会の様子

< 国文学研究資料館展示室より > 特設コーナーのご案内

当館展示室の一角に『特設コーナー』が設けられているのをご存知でしょうか。『特設コーナー』では展示ケース4台を使用し、主に新収資料を中心に一つのテーマに絞った展示をしております。また同時にデジタル展示も行っており、モニターで特設コーナーに展示している資料の画像や、挿絵などもご鑑賞いただけます。

今年の3月から5月にかけては、百種類もの豆腐料理の調理法を収めた『豆腐百珍』をはじめとする江戸料理のレシピ本を展示し、多くの方々にご来館いただきました。

特設コーナーは特別展示開催期間を除き、約2ヶ月に一度展示替えを行います。7月13日からは江戸時代の多摩地域の様子を紹介する展示、1月15日からはお正月の時期に合わせてかるたと双六関連の展示も行われますので、今後もぜひご注目ください。



特設コーナー「江戸の料理書・料理本」の様子

平成29年度 特設コーナー展示スケジュール

期 間	テーマ
3月22日～5月9日	江戸の料理書・料理本
5月11日～7月11日	馬琴生誕250年記念展示～伝奇小説の世界～
7月13日～9月16日	アーカイブズが語る近世後期の多摩地域
10月11日～12月15日	※特別展示「伊勢物語のかがやき―鉄心斎文庫の世界―」開催のため特設コーナーなし
1月15日～3月13日	かるたと双六(仮)
3月15日～5月中旬頃	近世の日本人と仏教(仮)

※展示室開室時間:午前10時～午後4時30分(入場は午後4時まで)

日曜日・祝日、夏季一斉休業日、展示室整備日は休室となります。詳しくはホームページでご確認ください。
(<http://www.nijl.ac.jp/pages/event/exhibition/2017/bungakushi201706-09.html>)

フォーラム「なぜアーカイブズは必要なのか Part.2 地方再生に向けた公文書管理」の開催

2017年5月12日、宮城県釜石市“釜石 PIT”にて国文学研究資料館のアーカイブズ研究に取り組む3研究グループ主催による「なぜアーカイブズは必要なのか Part.2 地方再生に向けた公文書管理」を開催しました。当日は、共催していただいた釜石市職員の方々をはじめ、70名を越える多くの方々にご参加いただきました。

本フォーラムは、当該地域が抱える震災、そして地方再生という二つの問題について、公文書管理とその活用による問題打開の可能性に焦点が当てられました。当日は、金山正子氏（元興寺文化財研究所）の司会のもと、野田武則釜石市市長の挨拶の後、①青木睦氏（国文学研究資料館）「これからの被災文書レスキューと震災アーカイブズのあり方」、②河瀬裕子氏（熊本森都心プラザ図書館）「熊本地震 震災アーカイブズ収集の取り組み」、③加藤聖文氏（国文学研究資料館）「公文書を活用して地方再生を図るために」、④橋本竜輝氏（天草アーカイブズ）「天草アーカイブズにおける公文書の移管と評価選別」、⑤高橋一倫氏（大仙市アーカイブズ）「公文書管理法を活かした新設アーカイブズ—大仙市の事例から—」の5つの報告があり、それらをうけて、奥村弘氏（神戸大学）・上白石実氏（盛岡大学）両氏からコメントがあり、続けて会場を含めた討論が行われました。

報告は大きく二つに分かれ、第一に、青木・河瀬報告は、震災からのアプローチによるものでした。青木講演では、これまで同氏が行ってきた様々な資料レスキューの活動を紹介し、釜石市で実施してきた活動が報告され、震災アーカイブズのあり方と今後の課題について明らかにした上で、震災に常に備える必要性が提起されました。続けて、河瀬氏は、昨年4月に発生した熊本地震に伴う図書館の取り組みとして「震災関連生活情報コーナー」の設置や、「震災資料収集」事業の実施について報告がありました。そのなかで、こうした活動で得た資料と当該地域における過去の震災情報とを併せて市民に供することは、震災の記憶を次世代につなぐために重要であることが強調されました。

第二に、公文書管理からのアプローチによる加藤・橋本・高橋の三氏の報告が続きました。加藤氏は、今後の地方自治体の活動には住民の理解が不可欠であり、その鍵に公文書管理制度の活用にあることが提起されました。続けて橋本・高橋氏からは、加藤報告をうけて、両氏が所属する天草・大仙両アーカイブズにおける実務に関する報告がありました。両氏ともに、公文書の適正な管理と保存、そして公開利用について各館の実例が報告され、特に、公文書の移管と評価選別の基準について詳細な説明があり、公文書管理を通してどのように各地域の歴史を創成・蓄積していくのか、実例が示されました。

上記の報告に対し、コメンテーターの両氏より、公文書管理の実務内容について、また、地域社会の結合など、公文書が持つ可能性についてなど質問とのコメントが加えられ、各報告者よりの応対がありました。続けて、会場より、公文書館設置にむけての必要設備や、紙資料のデジタル化による保存などの質問があり、活発な意見交換が行われました。

本フォーラムが行われた釜石市は、「地方再生」・東日本大震災からの復興と、二つの課題を抱えています。その課題解決策を模索するなかで、今回、公文書が持つ可能性について、当該地域の方々と共有できたことは大きな成果となりました。これを契機として、今後、二つの課題解決にむけて行政と市民が協同して公文書問題に取り組みが進展することを祈念するとともに、今後も協同して課題に取り組んでいく必要性を改めて認識するにいたしました。

（堀内 暢行）



茨城大学地球変動適応科学研究機関（ICAS）と連携協定締結

さる5月31日、茨城大学地球変動適応科学研究機関（ICAS）と当館との間で、連携協力に関する協定を取り交わすための協定締結式が、茨城大学水戸キャンパス事務局棟でおこなわれました。当館からは谷川副館長兼古典籍共同研究事業センター長、山本副センター長、西村准教授が出席し、三村信男茨城大学長への表敬訪問のあと、三村学長のご列席のもと、多くの関係者の見守るなか締結式が挙行されました。両機関による挨拶のあと、谷川副館長と伊藤哲司 ICAS 機関長との間で調印が交わされ、記念撮影となりました。当日は報道機関5社の取材もあり、式後、活発な質疑応答もなされました。



ICAS では、人口増加や経済成長の見込まれるアジア・太平洋地域が、その一方で気候変動や自然災害の厳しい影響を受けている実状を踏まえ、その適応策の検討やサステイナビリティ（持続可能性）学の研究と教育を進めておられます。

日本は、これまで多くの災害に見舞われ、そして復興を遂げてきました。それらは現代の記録のほかにも、連綿と古典籍のなかにも記述され、いかに人々が災害に相対したかを知ることができます。過去の対応事例を参照し、それを踏まえて未来にどう適応できるのかという展望を探ることは、古典籍を研究する当館としても新たな視点での取り組みとなるはずです。

この連携協定は、当館が進めている NIJL-NW プロジェクトでの異分野融合研究のうち、典籍防災学の取り組みのひとつという位置付けで、両者で共同研究を進めていくために交わされたものです。個人と個人との研究ということは従来行われていましたが、機関同士で覚書等を交わし実施していくことで、より積極的な研究活動や交流が期待できます。研究を進めていくだけでなく、市民に向けたアウトリーチ活動などへも取り組み、その活動の幅を広げていけたらと計画しているところです。

当日、締結式に併せて同所にて記念研究会が行われました。当館からは西村准教授が「地球変動適応に向けての古典籍・古文書の可能性—山梨県・甲斐国事例に—」と題して発表し、茨城大学からは小荒井衛理学部教授により「応用地学の立場から見た典籍災害学への期待」と題した発表がなされました。予定時間を超えての質疑など、そのスタートに相応しい研究会となったことを喜ぶとともに、当日の締結式、研究会の運営に当たられた茨城大学関係者の皆様にお礼を申し上げたいと思います。



本ニュース発行直前に開催された第3回「日本語の歴史的典籍国際研究集会」（7月28日・29日、当館大会議室）のパネル4「生活・環境と古典籍—異分野融合研究の可能性」において、研究会のメンバーである茨城大学地球変動適応科学研究機関田村誠准教授により「気候変動適応学と歴史学、国文学との共働可能性」という発表もなされており、当館の国際研究集会に集う多くの人文系の研究者にも、この分野の研究の可能性を呈示することが出来ました。

※

※

NIJL-NW プロジェクトも4年目を迎え、新たな共同研究のテーマも一部ではじまりました。またこれまでの3カ年で進めてきた共同研究もその取りまとめの段階に這入っています。新旧合い混じりながら、異分野融合研究や国際共同研究などの成果も発信していきます。NIJL-NW プロジェクトのホームページもこの4月から装いも新たにリニューアルオープンしています (<http://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/>)。

新日本古典籍総合データベース (<http://kotenseki.nijl.ac.jp/>) やお知らせなどが一目でわかるようなユーザー目線での変更となっています。共同研究についてもこちらから発信していきますのでどうぞご期待ください。

シンポジウム 「書物と文化」

高麗大学校との学術交流協定に基づき、10月24日(火)に当館において合同のシンポジウムを開催します。テーマは「書物と文化」。古典文学作品はすべて書物に書かれています。容れ物である書物と作品の内容に関係があるのかなのか。興味深いテーマにつき、日韓の研究者が発表と討論を行い、交流を深めます。

第41回国際日本文学研究集会

The 41th International Conference on Japanese Literature

当館では、国内外の日本文学研究者による研究発表・討議により、広い視野からの日本文学研究の進展を図り、研究者相互の国際交流を深めるため、国際日本文学研究集会を開催しています。

平成29年度は、以下のとおり開催します。

日 程 平成29(2017)年11月11日(土)～11月12日(日)

主 催 大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国文学研究資料館

会 場 国文学研究資料館

内 容 ①研究発表
②ショートセッション発表
③ポスターセッション発表
④多和田 葉子氏とロバート キャンベル館長との対談(予定)
※研究発表者及び研究発表表題については、9月下旬に決定し、プログラムを当館ホームページにて公開する予定です。

使用言語 日本語

参加要領

- ・参加費:無料
- ・参加資格:日本文学に関心のある方(研究者・大学院生・学生・留学生など)
- ・申込み方法:後日、当館ホームページにてお知らせします。

(問い合わせ先)

国文学研究資料館 国際日本文学研究集会事務局

〒190-0014 東京都立川市緑町10-3

TEL:050-5533-2911

FAX:042-526-8604

E-mail:icjl@nijl.ac.jp



平成28年度研究発表



平成28年度ポスターセッション

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況

○平成29年度入試説明会

平成29年10月7日（土）13時30分から、平成30年4月入学希望者を対象とした入試説明会を開催します。

詳細は、当館 web サイト「日本文学研究専攻」ページにて御確認ください。

<http://www.nijl.ac.jp/~kyodo/soken.files/enter/seminar.html>

また、当日は第1回特別講義も開催いたします。特別講義は入学希望者以外の方も御参加いただけます。多数の御参加をお待ちしております。

<開催概要>

日 時：平成29年10月7日（土）

13:30～17:00

会 場：国文学研究資料館

内 容：専攻や入試についての説明、
施設見学など

■特別講義■ 15:00～16:30

「近世の学芸と文学」

講師：一戸 渉 氏

（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫 准教授、
平成22年3月当専攻修了）

○平成29年度新入生紹介

平成29年4月11日（火）に、総研大の葉山キャンパスにて入学式が執り行われ、当専攻に新入生2名（古明地 樹氏、花上和広氏）が入学しました。



落合専攻長（中央）を囲んで
新入生の古明地さん（左）と花上さん（右）

○修了生による聞香体験の開催

平成29年7月6日（木）に、国文学研究資料館において、武居雅子氏（平成29年3月当専攻修了）による聞香体験が開催されました。



この企画は、博士論文テーマである「香道と文学」に関連して、一般にはなかなか馴染みのない香道の世界を少しでも知ってもらいたいという武居さんの御厚意により開催されたものです。香道の基礎知識や文学との関わりについての解説もしていただきながら、初心者向けに特別に大きめに切った香木での聞香体験となりました。

参加した教員・院生からは香木や香りの表現方法等について多数の

質問も出されました。「とても敷居が高く、難しい印象を持っていたが、自分でも楽しめるものだということがわかり、より興味が強くなった」、「貴重な日本の文化としてぜひ世界にも広めたい」等の感想が出され、大好評のうちに閉会しました。



8月							9月							10月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5						1	2	1	2	3	4	5	6	7
6	7	8	9	10	11	12	3	4	5	6	7	8	9	8	9	10	11	12	13	14
13	14	15	16	17	18	19	10	11	12	13	14	15	16	15	16	17	18	19	20	21
20	21	22	23	24	25	26	17	18	19	20	21	22	23	22	23	24	25	26	27	28
27	28	29	30	31			24	25	26	27	28	29	30	29	30	31				

● 開館 : 9:30～18:00 ● 請求受付 : 9:30～12:00, 13:00～17:00 ● 複写受付 : 9:30～16:00
 ただし、土曜開館日は、
 ● 開館 : 9:30～17:00 ● 請求受付 : 9:30～12:00, 13:00～16:00 ● 複写受付 : 9:30～16:00

展示スケジュール (8月～10月)

通常展示「書物で見る 日本古典文学史」
 会期 6月12日(月)～9月16日(土)
 特別展示「伊勢物語のかがやき 一鉄心斎文庫の世界」
 会期 10月11日(水)～12月16日(土)
 ※休室日
 日曜・祝日、夏季一斉休業に伴う休室日(8月9～16日)、展示室整備日(9月13日)

大学支援「国文研でゼミを」 大学教員の皆様へ

学部・大学院で行っているゼミや講義を国文学研究資料館で行いませんか。豊富な所蔵資料を手に取りながら、ゼミ等を行うことができます。ぜひご活用ください。
 ◆お申込みはEメールでの受付けです。
 詳細は当館 WEB ページをご覧ください。
<http://www.nijl.ac.jp/pages/event/seminar/univ/shien.html>

表紙絵資料紹介

こぐちもくはん 木口木版版刻 エミール・アダン「一日の終わり」

明治になって日本に、木口木版という新しい印刷技術がもたらされた。ツゲやツバキなどの木材を切り株状に切った面を彫って作る木版の技術である。同じ凸版の活版に組み込んで文字と図版とを同時に印刷できるため、18世紀末からヨーロッパで書物の挿絵に多用された。明治日本においても、代表的な雑誌の表紙を飾る。写真銅版に取ってかわられるまで新聞報道に幅広く活用され、後の名だたる洋画家が下絵作成に関わっていた。教科書の図絵にも早くから取り入れられている。

木口木版は日本の伝統的な板目木版のような大きな版木は得られないが、硬い版木となるため、精巧な彫版が可能になる。この技術をバリーで学んできたのが合田清である。合田は、1886年には、エミール・アダンの絵画「一日の終わり」を木口木版に彫刻し、フランスの美術家協会のサロンで入選を果たす。

合田は翌1887(明治20)年に帰国するにあたり、それを電気銅版にして日本に持ち帰った。同年、洋画家の山本芳翠とともに、生巧館という木口木版製作所兼画学校を設立する。

本版刻は、その電気銅版から木刻し直された作品で、生巧館の広告や教材として使われた。

国文学研究資料館には、生巧館の作品が、清刷・校正刷りなど、のべ6500点収蔵されている。その作品群は、画家の下絵が出版物になるまでの工程を如実に物語る。石井香絵「国文学研究資料館所蔵品にみる生巧館の活動と木口木版の受容」(『国文学研究資料館紀要』第43号)には、掲載媒体や何の試し刷りかが判明した分の当館収蔵品が紹介されている。(18cm×13.5cm)(未整理資料)
 (野網 摩利子)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館

〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3

Tel:050-5533-2910 Fax:042-526-8606

発行日 平成29年(2017)7月31日

編集 国文学研究資料館企画広報室

印刷所 睦美マイクロ株式会社

©人間文化研究機構国文学研究資料館